

卷頭言

生成 AI は敵か味方か? —日常診療の情報共有手段として—

新潟県医師会

副会長 川 合 千 尋



ChatGPT は2022年11月から、Windows 365に実装された Copilot は2023年11月から、Google の Gemini は2023年12月から一般利用が可能になった。それらは単なる生成 AI（何かを作ることが目的）ではなく、対話型 AI（人と話すことが目的）の機能も備えた対話型生成 AI である。10年以上前から Google Based Medicine のように、適切な Google 検索の活用が診療に役立つという議論があったが、現在では検索中心の支援から、生成 AI による知識支援へと進化している。

【生成 AI にも当てはまるロボット3原則】

生成 AI は物理的なロボットではないものの、「人間と対話し、意思決定に影響を与える自律的システム」であることから、「身体を持たないロボット」と言われている。善悪の判断力を備えていないため、倫理的制御が不可欠であり、アシモフのロボット3原則に準じた対応が求められる。ロボット3原則の生成 AI における対応、実装上の課題は次のように考えられている。第1原則：人間への危害防止→有害コンテンツの排除、誤情報や虚偽生成の防止、心理的影響の評価困難性などが課題となる。第2原則：命令への服従→ユーザーの指示に応答する設計が基本であるが、犯罪教唆など不適切な命令への対応が必要である。第3原則：自己防衛→システムの安定性やセキュリティ対策が求められるが、誤作動時の自己修復や停止判断には限界がある。

【日常診療での情報共有手段として】

当院では、主に患者さんへの説明補助や質問対応に对话型生成 AI を活用している。医師自身が説明しつつ、AI にも質問を投げかけ、患者さんと一緒に画面を見ながら情報を補足することで、理解が深まる傾向がある。口頭や手書き、パンフ

レットによる説明よりも、画面上の文字と一緒に追う方が効果的である。希望があれば印刷して提供している。

生成 AI の回答を、患者さんが理解しやすい言葉に言い換えることも重要であり、不安や疑問に對して丁寧に対応することが可能である。また、医師自身の知識の再確認にも役立っている。

【生成 AI は敵か味方か】

生成 AI は、診療の質と効率を高める「味方」としての側面を持つ。患者さんへの説明補助に加え、診断支援として過去の症例データやガイドラインを参照し、見落としがちな鑑別診断を提示することで、診断精度の向上に寄与する。

一方で、「敵」としての側面もある。生成 AI が流暢に提示する回答には、医学的根拠が乏しい

“それっぽい誤答”が含まれることがあり、誤情報が診療に影響すれば患者の安全を脅かす。また、AI が提案した診断や治療方針に誤りがあった場合、責任の所在が曖昧である。医師が AI に過度に依存すれば、倫理的問題も生じかねない。

生成 AI は日常診療における強力な補助ツールであるが、医師の判断力や倫理観を代替するものではない。味方と思っていても、知らぬ間に敵となる可能性がある技術を、私たちは冷静に、そして責任を持って扱う必要がある。医療は人ととの営みであり、AI はその営みを支える道具にすぎない。味方にするか敵にするかは、医師自身の姿勢と使い方にかかっている。

最後に、これら米国発のサービスが市場を席巻する中、日本の文化や伝統を理解した国産の生成 AI が、できるだけ早く利用可能となることを期待している。